

I Sant'Innocenti（見捨てられた児童の会）の活動

マルコ・ロマーニ（ローマ支部責任者）

オリーブジャパンはイタリアの I Sant'Innocenti (I.S.I) を中心にいくつかの国にあるカウンターパートと共に、中米の貧困に苦しむ若者への教育支援を行っています。2018 年 1 月 6 日に名古屋で行われた I.S.I のローマ支部の責任者、マルコ・ロマーニの講演記録です。



（ISI はジョヴァンニ・リヴァ氏が教えた「兄弟愛に基づく平和」の理念の下、主に中米の子どもたちのための働きである。ISI は 2001 年のエルサルバドル大地震の直後から、子どもたちのためのプロジェクトを続けている）前号より

上は現在、サンタテクラ市のスラム街に住む子どもたちのために寺子屋のような活動をしている写真です。このサンタテクラ地区はマラスというギャンググループが支配しており、小さな子どもでさえ麻薬を打ち、ギャングによる誘拐事件が多発するなど非常に過酷で治安の悪い地域です。よって児童を守るプロジェクトがもっとも重要であると言えます。私たちはこの大地震が起きる前から、女性のための職業訓練として洋裁講座を行っていました。母親が洋裁を覚えることによって、子どもに服を作ることができ、何よりも就職することができました。ですから母親たちは喜んで講座に参加していました。そこで、受講中の母親たちに代わり、子どもの面倒を見る寺子屋のようなプロジェクトが始まったのです。論理や机上の計画ではなく、実際に人々と出会い、相手が何を必要としているかを理解してこそ、プロジェクトが生まれます。

どのように私たちのスタッフが働いているか少し説明してみます。子どもたちが住んでいるスラム街は中央に 2 メートル幅の道があり、その両側にバラックが建っています。家と呼べるものではありません。小さな 1 つの部屋に 1 つのベッド、そこに 6、7 人がひしめき合って寝ています。家具は小さな机が 1 つあるくらいです。スタッフは毎日その地区に出向き、1 軒ずつドアをノックします。家から出てきた子どもたちを順番にマイクロバスに乗せます。

これは寺子屋です。壁がなく、屋根もしっかりしていません。現在、私たちは子どもたちが安全で安定した環境で学ぶ場として、しっかりとした園舎を作りたいと考えています。今日この会場にいる私たちの友人ピエトロ・ヴェッキは建築学部を卒業したばかりで、卒業論文は寺子屋（ラス アベヒータス：スペイン語で「小さなみつばちたち」／通称みつばち保育所）園舎のプロジェクトでした。今、私たちは学校建設に力を入れています。

この寺子屋（ラス アベヒータス）には様々な年齢の子どもが集まるのでクラス分けをしています。小さい子は遊びが中心ですが、少し大きな子には宿題を手伝っています。エルサルバドルでは学校教育は無償ですが、多くの子はお金を稼ぐために学校に行かず、親の仕事を手伝っています。ですから、まずは宿題を一緒にして、ここに来ると楽しいことがあるという雰囲気を作って学校に行くように勧めます。



皆さんは、このように小さな子たちが一緒に 1 つのテーブルを囲んでいる写真を見てもたいしたことではないと思われるかもしれませんが、実はとても大きなことなのです。この子どもたちを座って一緒に勉強させるのはすごく大変です。この子どもたちは非常に劣悪で乱暴な環境に生きているため、他の人に対して暴力的です。物を盗んだり人に手を出したりします。ですから、座って一緒に遊ばせたり勉強させることが一番大きな仕事

です。この寺子屋は子どもたちを全体的にケアする場です。一人の人間として調和的に育つように見守っています。私たちはこの寺子屋にグアルデリアというニックネームをつけました。グアルデリアとは、“守ってあげるよ”という意味です。このグアルデリアに初めて通ってきた 1 人の若者が、先日大学を卒業しました。当時、日本人の H さんが面倒を見ていた子でした。彼は H さんに感謝の手紙を送りました。このグアルデリアだけではなく、このスラム街で初めて大学を卒業した人だと思います。

スラム街にある子どもたちが集まるセンターは様々に発展して、現在では医療巡回サービスなどを行うようになりました。貧困地域の医療は複雑です。子どもたちは病院に行くことができません。2 ヶ月おきにボランティアの医者と看護師が様々な病気にかかっている子どもたちを診てくれます。診療の日だけでは終わらない場合は、私たちが薬を購入して家族に処方方を説明します。子どもの病気が治っても根本的解決にはならないので、両親、祖父母、家族にみな、医療巡回サービスを受けるよう勧めています。手術や入院が必要なら手続きと治療を受けるためのフォローをします。現在、この医療巡回サービスに来る大勢の人のためにカルテ作りをしています。彼らは貧しくて病院に行けないので、そもそもカルテ（病症録）がありません。カルテを作ることで、存続的なフォローができるようになりました。ある時、センターに厚生大臣が来られ、とても驚かれました。「あなたがたのサービスはこの国でこの場所しかない」と言ってくださったのです。普通、カルテを持っているのはお金持ちだけだからです。

この 2 人（お歳を召した男性と女性）の側にいるのはイタリア人のベネデッタです。このお婆さんはニコニコ笑っています。ベネデッタを信頼しているからです。ただ医者と患者、スタッフと患者という関係ではなく、そこに私のことを本当に考えてくれている人がいると思わせてくれる場です。



歯科医師もいます。人々の歯の状態が酷いため特別に歯科治療の日が決まっています。薬は製薬会社からある程度寄付していただいているのですが、自分たちでも購入しています。特定の季節に流行する病気対策として、その時期に予防薬を飲ませています。ほとんどの子どもは寄生虫を持っており、放っておくとお腹が膨れてしまいます。これが先ほど紹介したカルテです。後ろの方に、“FUNDIPRO(フンディプロ)”と書いてあります。これは ISI のカウンターパートで、この地域の NGO です。私たちは外国ではなく、現地の NGO として活動しています。

中南米における人間の尊厳と女性の立場 その1

ジョヴァンニ・リヴァ

1994年11月26日、全国NGOの集い分科会にて、ジョヴァンニ・リヴァ師が講演した内容をお届けします。リヴァ師は「友情こそが真の平和を作る」という理念のもと、祈り、教育、働きについて絶えず若者に教えました。オリーブジャパンと各国のカウンターパートの活動はその教えを礎としています。

私は日本が大好きですが、残念ながらまだ日本語が話せません。来日するのは5度目になります。ほとんどは若者達に講義をするために招待されています。私の従来職業は教師です。22歳から教師を始め、まず高等学校で哲学と文学を教えました。この仕事を通して若者達が好きになり、人間との出会いの大切さが分かるようになりました。私は53歳ですが、1960年代にヨーロッパでは第三世界ブームが起こり、まだ若くて熱心だった私たちは第三世界に興味を持って、友人と共にそのような開発国のために援助協会を始めました。20年前から様々な国を走り回ったのでほとんどの国は知っていますが、アフリカはナイジェリアしか知りませんし、アジアでは日本、韓国、フィリピンしかわかりません。

まず最初に差別という言葉から話を始めたいと思います。ところで、男女差別はいつ行われるのでしょうか。例えば仕事の分野を考えてみると、同じ才能を持っていてもチャンスは男女平等に与えられず、同様にサラリーも平等には支払われていません。世界中（アラビア世界を除く）どの国でも男女差別をなくす様々な法律が考えられていますが実際には差別が行われています。この男女差別を考えてみると言い訳が三つ挙げられます。一つは女性は男性よりも肉体的に弱いということ。しかし、私は韓国やラテンアメリカを駆け回る時に労働者の姿をした女性をたくさん見かけ、ひょっとしたら私の方が負けるかもしれないと思ったことがあります。肉体的な力が異なると考えられているために、女性は男性と同じ仕事をして同額のサラリーを貰えないわけです。二つめに、女性の心理も差別の対象になります。女性は男性よりも繊細さや母性を持っていると考えられています。ですから女性は責任のある仕事をする事ができません。でも私の経験から言わせていただければ、例えば、私たちはメキシコで学校を創立したのですが、そこでは女性スタッフに全てを任せています。その人が男性スタッフを動かしています。立派なマネージャーです。ですから女性と男性どちらが優れているか否かという心理学的な言い訳が少し目立ちすぎるような気がします。三つめは女性は家庭を中心にして家庭を第一に考えるということです。ですから男性マネージャーは女性を雇う前に、家庭を持つ女性は先に家庭を考慮するので会社は二の次になって危ないと考えます。しかし立派な女性、自分の子どものことを心から考えている母親であれば、子ども達がどのように生活しなければならないのか、彼らにどのような将来が在るのかを考え、幅の広い人間としてより良い国を作り出すことを希望する女性になると思います。まさかちっぽけな家庭に閉じこもって働きたいという女性ではないでしょう。この三つの理由は、現在この男女差別の根本になっていますが、やはり言い訳にしか過ぎません。

私は特に女性を守りたいとは思いません。ここで私たちは女性のために話をしているのだとは思っていません。私は人間を守りたいのです。どんな人間でも、女性、男性、若者、老人、すべての人間を守るべきだと思います。私が働いている国々（メキシコ、ヴェネズエラ、エルサルバドル、ホンデュラス）の中でとても目立つ問題は、人間が平等に扱われていないことです。違う事は変な事、違う人は変な者と考えられていることです。自分と違うものは尊敬することができないというような問題が最も激しいと思われます。その差別を受けている人の中で女性は最も弱い立場にあります。南米では女性は家の中にいなければならないと考えられています。子どもの世話をしなければなりませんから仕事など持てません。或いは妻と子どもを見捨てて他の女性と家庭を作る男性が多いのです。ですから女性の立場は益々弱くなってしまいます。南米では男性に比べると女性のサラリーは低く、そのため銀行からお金を借りたくても断られるケースがほとんどです。つまり女性に対する疑いがとても強いわけです。これは嘘ではなく現実です。ところで女性はとても子どもに愛されています。父親よりも母親の方が子どもに愛されているでしょう。例えば南米では母の日はとても大きな祝日です。通常では休暇をとることができませんが、ほとんどの人は二日間休んでしまいます。ですから自分が60歳であっても80歳の母親がいるなら、どんなに遠くても会いに行きます。これは母親が子ども達に対してのものですごく大きな役割を果たしているからです。母親は尊厳のあるもの、苦しみに耐えるもの、差別をうけても文句を言わずにやるべきことを果たすものです。ですから子どもの目の前にはとても立派な態度に映ります。

（次号に続く）

チャリティーショップ 2/23(土)・2/24(日) CAZAN 珈琲本店横 (旧タツミ)



エルサルバドルの子どもたちのための

チャリティーショップ

2/23(土) 11:00-17:00

2/24(日) 10:00-15:00

カザン珈琲本店横 (旧タツミ)



主催：オリーブジャパン国際開発協力協会 〒465-0025 名古屋市名東区上社 2-94 北ハイツ104
TEL: 080-4306-1057 (鈴木) HP: <http://olivejapan.sakura.ne.jp/>

中米の貧困に苦しむ子どもと若者の教育支援のためにチャリティーショップを定期的で開催しています。

ご家庭にある、日用品、衣類、靴、アクセサリ、バッグ、雑貨などのご提供をよろしくお願いいたします。皆さまのご協力をお待ちしております。

連絡先 080-4306-1057(鈴木)

学んでチャリティー！2018年春開校！！
初級イタリア語講座
Ciao! Studiamo Italiano insieme
一緒に学びましょう！
講師：ピエトロ・ヴェッキ
ローマサピエンツァ大学建築学科卒。
建築士、日本語教師を学ぶため2018年来日。
毎月第1・2・4水曜日
19～20時 本山生協会館ルーム1
受講費：5000円/月
※授業料はチャリティーに充てられ、講師の給与は別途として渡されます。
主催：オリーブジャパン国際開発協力協会 (株)オリーブ 080-4306-1057

——開講中—— 初級イタリア語講座

第1、2、4水曜日
19時～

本山生協会館ルーム1
受講費：5,000円/月

随時受講可能

申し込み

080-4306-1057
(鈴木)

今後の予定

チャリティーショップ

4/6(土)・4/7(日)

本山生協会館 2F ルーム1

講演会

「平成デモクラシー」

—沖縄県民投票と私たち—

講師：命どう宝あいち代表 新城正男さん

2/16(土) 10:00-

ウィルあいち セミナールーム5

「朝鮮学校無償化裁判と教育基本法」(仮)

講師：裴 明玉 弁護士

3/3(日) 10:00-

ウィルあいち セミナールーム5

講座・チャリティーショップの収益金はすべて、イタリアのI.S.Iを通して、中米の貧困に苦しむ子どもと若者の教育支援事業に充てられます。

会員募集 オリーブジャパンの活動に賛同していただける会員の方を随時募集しています

- ・賛助会員 (1ヶ月1口10,000円)
- ・正会員 (1ヶ月1口5,000円)
- ・協力会員 (1ヶ月1口2,000円)
- ・参加会員 (1ヶ月1口1,000円)
- ・同調会員 (1ヶ月1口500円)

振替口座番号

00890-1-24582

会員の皆様には、会報「オリーブプレス」と講演会、バザー等のご案内を優先的にさせていただきます。

郵便振込用紙に必要事項と会員の種類、納入方法(月払い/年一括)をご記入の上、会費を納入ください。

オリーブプレス Vol.28 2019年2月発行

オリーブジャパン国際開発協力協会 olivejapan80@hotmail.com

<http://olivejapan.sakura.ne.jp/>

編責：オリーブプレス編集部